

評価

自己評価Aと外部評価の評価区分	きわめて良好	自己評価Bの評価基準	5	実現状況は極めてよく意識も高い／数値目標に対し100%以上達成
	良好		4	実現状況は良好で意欲もある／数値目標に対し80～99%達成
	おおむね良好		3	実現状況はおおむね良好／数値目標に対し60～79%達成
	やや不十分		2	実現状況はやや不十分で取組が不安定／数値目標に対し40～59%達成
	努力を要する		1	実現状況は不十分で努力を要する／数値目標に対し39%以下の達成

Ⅵ 教師の研修

学校の状況		自己評価A	学校関係者評価	外部評価委員のコメント
授業実践力向上のために教職員研修が活発に行われている。	前期	おおむね良好	おおむね良好	①児童の成長を確認した上で、新たな目標を学校として共通理解しながら設定し実践に取り組んでいくことは素晴らしいことである。成果を期待したい。②児童の実態に即した学習指導(コース別学習)の展開は素晴らしいことである。どのクラスからも充実した成果を期待する。③教師のアイデアや工夫が児童の学習内容の定着や学力向上につながっているはずである。研修を一層充実させていただきたい。④指定訪問等には、自ら授業者として手を上げたいものである。
	年度	おおむね良好	おおむね良好	①「ジャンプノベルタイム」の取り組みを開始したことには大きな意義を感じる。取り組んだことによって明らかになったことすべてが成果である。見え始めた児童の実態が今後解決すべき課題として、すでに動き始めていることに先生方の使命感を強く感じる。有浦っ子のために今後も努力と研鑽を期待する。
自己評価の概要と学校の改善策	【前期(一年度)】			
	①昨年度までの取組を通して、子どもたちは授業の流れ「有浦スタイル」が身に付き、見通しをもって授業に臨み、自分の考えをもつことができるようになってきた。また、友達を巻き込んだ発言をしたり、少人数での目的に合った話し合いをしたりする姿が見られるようになってきたことなど、「集団」としての話し合いがスムーズにできるようになってきたと感じる。しかし、一人一人の「個」に注目してみると、全体の中で発言できる児童に限られていることや、友達の発言を自分事と捉えて聞いたり考えたりすることができずにいる児童もいる。そのため今年度は、算数科を中心とした「個」の『伝える力』を高める授業づくりを目指しているところである。 ②学び合いの充実を目指した取組として、1学期の初めに学年ごとの「学びのオリエンテーション」を実施した。「有浦スタイル」を確認した他、児童の発達段階に合わせて、今年度力を入れていきたいことをプレゼンテーションを活用しながら分かりやすく伝えた。また、各教室に「反応ワード」を掲示したり、児童一人一人に、発言をつなぐための言葉の例「のべるカード」を配付したりして、児童がいつでも「自分の考えを言葉にして伝える」ということを意識できるようにしている。さらに2学期初めにも、大館市教育研究所の米澤貴子所長をお招きして「学びのオリエンテーション」を実施し、みんなでつながりを大事にしながら成長していくこと、上学年においては算数科コース別学習の意義についてご指導いただいた。本校では4年生以上で習熟度別学習(コース別学習)に取り組んでいるが、1学期末に実施した児童のアンケートからは、それぞれの学年の8割程度の児童が習熟度別学習の方がよいと回答している。 ③年度初めに研究・研修部の職員が子どもたちと一緒に提示授業を行い、それを全職員で参観した。これは、今年度新しく赴任した職員にも「有浦スタイル」の流れを共通理解してもらい、児童が自分たちで学び合いをつないでいけるようにするには、教師がどのように関わればよいかということについて研修するためである。また、職員会議や様々な研修会で重点指導事項を確かめたり、授業で工夫しているアイデアを紹介し合ったりしながら、PDCAサイクルを生かした研修になるよう努めている。 ④これまでに2度の指定訪問があり、授業提示、授業後の研究会での振り返りを行ってきた。研究会はグループごとのワークショップ形式で行うことで、授業者以外の職員一人一人も研修を自分事として捉え、授業改善について活発な協議がなされている。 〈後期の取組〉 ①前期の反省を踏まえ、授業がより児童主体のものになるように授業改善を図っていく。そのため、「ジャンプノベルタイム(発展問題にグループのみんなで協力しながら取り組む時間)」を新たに設定し、取り組んでみることにしている。児童一人一人の『伝える力』を高めるための指導や支援の在り方について、今後も全職員でアイデアを出し合いながら研修に努めていきたい。			
	【年度(次年度)】			
	①2学期以降、授業の後半に「ジャンプの課題」に取り組む「ジャンプノベルタイム」という学び合いの時間を設定した。その時間に身に付けた力を生かして、少人数グループごとに発展問題に取り組ませたり、自分たちにより身近な課題について考えさせたりすることで、児童一人一人が主体的に考え、自分の考えを伝え合う取組につながったのではないかと考える。一方で、児童にとって魅力的で、話し合う価値のある課題を設定することが難しく、「ジャンプノベルタイム」を実施できた授業に限りがあった。また、自分の考えを伝えることに苦手意識をもっている児童や、他の友達に任せきりになってしまう児童もいるため、すべての児童が主体的に取り組むことができたとは言えない。次年度に向けては、今年度に引き続き「個」の「伝える力」を高めていくとともに、児童一人一人の「分かった・できた」の実感につながる学び合いになるよう、校内研修の充実を図り、教師一人一人の授業力向上を目指していきたい。			

評価指標	実践課題	主な取組	自己評価B	
			前期	後期
13 指導力の向上	(14)授業改善	子どもの思考の流れを意識した授業の実践	3	3
		学び合いの充実を目指した取組		
		学び合いをファシリテートする力の向上		
14 研修の充実と活用	(15)校内及び自己のテーマに即した実践的研修の充実	選択教科の研究と一人一研究授業の実施・授業改善	3	3

「ジャンプの課題」の例

- 2年 国語科「紙コップ花火の作り方」「おもちゃの作り方をせつめいしよう」
※前書きの効果について考える。
→「前書きは必要でしょうか。」
- 4年 算数科「分数をくわしく調べよう」
※発展問題に取り組む。
→「1、2、3、4、5のうち、それぞれの記号に当てはまる数はどれでしょう。」
- 4年 社会科「風水害からくらしを守る」
※「秋田県」「大館市」「地域の人々」の立場で今後想定される災害に向けて話し合う。
→「長木川がはんらんしたら、どんなことができるだろうか。」

$$\bigcirc \frac{\triangle}{\square} - \star \frac{\star}{\square} = \triangle \frac{\star}{\square}$$

「ジャンプの課題」に取り組む児童



2学期末に実施した研究・研修アンケートより「ジャンプノベルタイム」についての成果と課題

【成果】

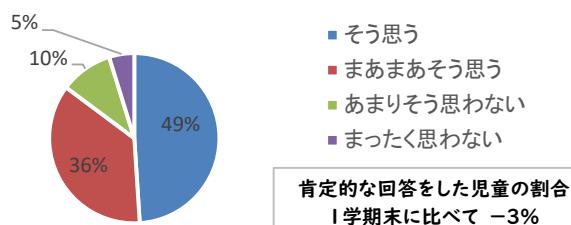
- 児童の学習意欲が向上した。
- 緊張感をもって取り組んでいる。
- 子どもたちが「ジャンプノベルタイム」を楽しみにしている。
- 挑戦しようとする子どもが増えてきた。
- グループで活発に意見を出し合いながら取り組んでいた。
- 子どもたちはとてもうれしそうに、「来たぞー！」という前向きな姿勢で取り組んでいた。

【課題】

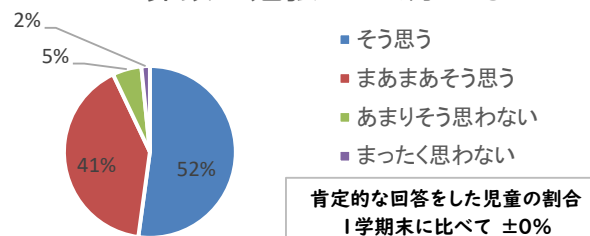
- 「ジャンプの課題」を考えるのが難しい。
- 話し合う価値のある課題を設定しなければならない。
- コース別学習の下位のコースではなかなか「ジャンプの課題」までいけない。
- 内容についてこれない児童も少なくない。
- 45分の授業をオーバーしてしまう。
- 基礎的な理解が追い付かない児童への対応と、より児童がわくわくするような「ジャンプの課題」の仕掛け方や個人への働きかけ方が課題。

2学期末に1～6年児童に実施した算数アンケートの結果より（一部抜粋）

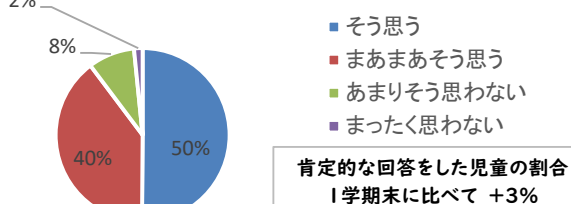
1. 算数の勉強がすきだ



2. 算数の勉強がよく分かる



3. 算数の授業では、課題やめあてについて、自分の考えをもって取り組んでいる



4. 算数の授業では、ペアやグループでの話し合いに進んで取り組んでいる

